

半導体レーザーのベンチャー企業「QDレーザ」(本社・川崎市)は10日、レーザー光を利用したメガネ型の視覚支援機器を使って、

視覚障害者の視力を改善させる臨床試験(治験)を、

網膜に映像投影 日本のベンチャー独で治験へ



レーザー光を活用したメガネ型の視覚支援機器を体験する女性。装着すると手前の画面が網膜に映しだされる(10日、東京大学で)

視覚障害者も「見える」メガネ

独のエッセン大学病院で行うと発表した。視覚支援機器は、同社と東京大学の荒川泰彦教授らが共同開発したもので、小型カメラで撮影した映像などをレーザー光で患者の網膜に直接投影する。網膜や角膜が傷ついた重い視覚障害者にも、鮮明な画像が提供できると期待されている。

治験は来年、網膜の中央部が傷つき、視野がゆがんだり暗くなったりする加齢黄斑変性の患者約100人で、効果と安全性を検証。来年末までに、欧州の医

療機器認証の取得を目指す。

エッセン大学病院のある独ノルトライン・ウェストファーレン州は、医療産業の育成に力を入れており、日本の技術も積極的に導入している。筑波大学の山海嘉之教授が開発した医療用ロボット「HAL」の実用化を支援。HALは同州での治験などをもとに、2013年に欧州の医療機器認証を得て、脊髄損傷患者のリハビリ治療に使われている。

QDレーザは、国内向けには医療機器ではなく、福祉用として、同様の製品を来年3月に市販する計画。